

認知構造から発声形態へのメタファー的な写像：
指示、否定、疑問の言語表現の身体性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 義晴 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1006

認知構造から発声形態へのメタファー的な写像

—指示、否定、疑問の言語表現の身体性について—

竹内義晴

1 身体主義・メタファー論的意味論

G. Lakoff & M. Johnson 1980, G. Lakoff 1986, M. Johnson 1987, G. Lakoff & M. Johnson 1999 によれば、人間の認知は基本的に身体経験に基づいている。さらに、抽象的で漠然とした認知経験や、新しく、言語的に扱いの定まらない認知経験は、身体経験などのより具体的な経験へのメタファー的な写像によって理解と伝達が可能になり、共有される知的財産となる。人間は、身体経験に基づき、メタファー的な写像によって、自分の経験と認知活動の可能性を拡大することによって、知的存在者としての能力を拡張してきたのである。

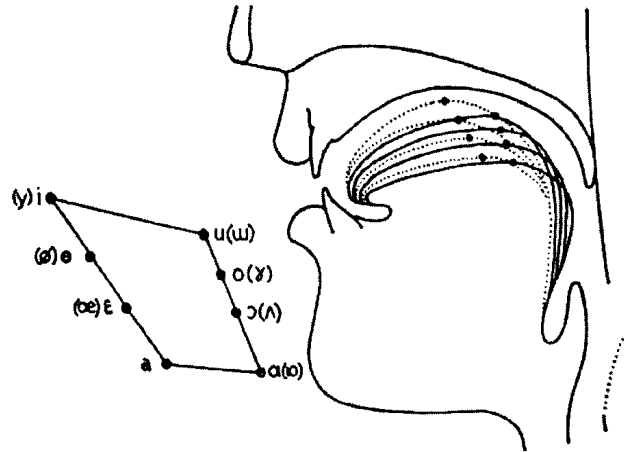
2 発声形態の身体性に投影される認知構造

言語音を発声する場合の舌の位置が、「自分・いま・ここ」を暗示する単語と、そこから離れていることを暗示する単語とでは異なることを、S. Pinker 1994 が紹介している。私は、Pinker の紹介したこの現象では、認知の構造が発声形態という身体的で具体的な経験にメタファー的に投影されているのだと考える。以下に認知構造の発声形態への写像についての議論を展開したい。

2.1 指示

2.1.1 発声における唇や舌尖の前後関係による指示の遠近の写像

Pinker の紹介によれば、「自分・いま・ここ」を暗示する単語では、舌が前方の高い位置に置かれ、「自分・いま・ここ」から離れていることを暗示する単語では、舌が後方の低い位置に置かれているのだという。Pinker はその例として »me« 対 »you«、»here« 対 »there«、»this« 対 »that« の対立を挙げている。



D. Jones による母音の発声と舌の位置の図解

私は、この議論を、舌の位置ではなく、舌尖の位置などの問題として議論したい。調音点の前後という観点から考えてみると、英語の »that« と »this« では、前者の中核にある母音 [a] の調音点の方が、後者の中核にある母音 [i] の調音点よりも前にあり、これは Pinker の指摘するように、舌の位置によって決まる。しかし、私たちにとって、発声上の調音がどこでなされるのかということとは、言語学でも勉強しないかぎり、生涯にわたってほとんど意識されることではない。

言語音発声の能力は、人間に生得的に備わっている音声に関わる言語能力発現のプログラムを前提に、その発現のキューを与える適切な初期環境が与えられて獲得される。この適切な初期環境とは、手本になる話し手と子供とのインタラクションであるが、子供が自分の手本になる話し手の表情に現われる、特に唇を中心とした発声器官の動きを見ながら、模倣によって発声を試み、音響・視覚の両側面から、手本になる発声と自分の発声とを比較し、改良を加えるという試行錯誤が、その重要な構成要素になっていると考えられる。私たちは生まれた直後から、発声と表情の相関関係に関心をはらい続けているのである。調音の位置のような意識による把握が難しい関係ではなく、調音をする表情において際立っている、唇や舌尖などの発声器官の前後関係のような、身近な要因が、私たちの認知におけるまとまりを写し出すのに使われていることは、非常に自然なことだと考えられる。

そのような観点から考察すると、調音をする表情において際立っている、唇や舌尖などの発声器官の前後関係は、指示の遠近の関係をちようどうまく

写し出す関係になっていることがわかる。英語では、一番身近な存在である自分に言及するのに、»I« よりも »me« が好まれる傾向があるのは、»I« は遠くを指し示す母音 [a] で始まり、»me« には、指示点を引きつける長母音 [i:] が含まれているからなのかもしれない。英語の指示語だけではなく、ドイツ語の »hier« と »da« や、»ich« と »du« における指示点の遠近の対立もまた、この、[h] + [i:] の音の連鎖と [a:] の長母音や、[i] + [ç] と [d] + [u:] の音の連鎖の発声における舌尖や唇の前後の差と対応しているのである。調音の位置ではなく、調音をする表情において際立っている、唇などの発声器官の前後関係が指示の遠近を写し取っていると考えることができるのである。

例えば、英語の指示音 [ð] やドイツ語の指示音 [d] は、歯と舌を使って、呼気を摩擦させたり破裂させたりする音であり、調音点の位置が口の前方にあるが、この時、歯や舌という発声器官が前方に突き出されて意識され、目立っているのである。これに対して、[i] 音の前の [h] と [ç] の二つの似た音は、唇の脇を側方に引く結果、発声器官全体が後方に位置する感じになるのである。

ドイツ語の »jener« と »dieser« の対立にもまた、[j] + [e:] + [n] の音の配列と、[d] + [i:] + [s] の音の配列を発声する場合の唇などの位置の前後差が関係していると考えられる。前者は後者よりも遠くを指示するが、[j] の発声をするためには、口蓋の前方に意識を集中させ、唇を突き出し気味に構えなければならないし、続く [e:] の発声でも、舌尖を前にもって来るなど、発声の意識は前の方に置かれる。これに対して、後者では、音節の中心になる [i:] が唇の脇を後ろに引くなど、全体に後方に引っ張る意識を伴って発声される。その結果、音節全体の発声を通じて、口全体が後方へ引っ張られる感じになる。語頭の [d] 音は、確かに口前方の歯と舌尖を使って発声されるが、音節の中心になる [i:] 音との関係で、口の前方の部分もまた後方に引っ張られているのである。このことと対応して、»dieser« の指示する場所もまた、»jener« よりも引いた位置になる。

日本語の指示語「あれ」と「これ」では、前者の語頭の母音 [a] では舌尖の位置が前に出され、後者の語頭の子音[k]では、唇が前気味に突き出され、口蓋前方で破裂が起きている。これらの発声器官の前方への動きが、「あれ」と「これ」の指示性を決定づけていると考えられる。この二つの指示語では、

「あれ」が遠くの対象を指示し、「これ」が近くの対象を指示するのに使われるが、この遠近の差に、この二つの表現における母音 [a] と [o] の対立が関係している。[a] の発声と [o] の発声における舌先の位置をくらべると、前者における位置が前なのに対し、後者における位置は後ろぎみなのである。

しかし、前者母音 [a] の発声と、後者の語頭音 [ko] の発声をくらべると、唇の突き出しや丸めによって、後者の方が、唇の位置は前ぎみである。そうすると、後者がより遠い所を指示する表現であっても良いはずであり、説明に矛盾が生ずるが、この点については後に議論する。

2.1.2 緊張・際立たせによる指示の及ぶ範囲限定の写像

(2.1.1) で »jener« と »dieser« の対立に触れた。発声に使われる唇などの位置という観点から考えると、»jener« が »dieser« よりも遠くを指し示すのは理解できる。しかし、次項 (2.1.3) で議論する破裂のエネルギーという観点から見ると納得できないことがある。破裂音 [d] という強いエネルギーを伴った音を使う »dieser« が近くの指示に使われ、»jener« という、破裂音ほどには強いエネルギーを持たない表現がそれよりも遠い所を指示するのに使われるのはどうしてだろう。

言語音の中でも、半母音の [j] は何か特別の地位を占めている。英語でもドイツ語でも、肯定の間投詞 »yes« や »ja« や、かけ声や呼び掛けの間投詞 »yo-heave-ho« や »yo-ho« にはこの音が入っているし、日本語の呼び掛け音やかけ声にも「やあ」というのがある。母音以外で調音上の抵抗が一番少なく、発声に緊張を与えることのできる音が、この半母音 [j] なのであり、しかもこの半母音が母音の前に付加されると、母音だけの音節とは違っためりはりがつけ加えられるのである。

剣道のかけ声の典型は「やあー！」であるが、これが「ああー！」ではどうにもさまにならない。「ああ」は日本語の肯定の間投詞であるが、短く発音して「あっ」にしてしまうと驚きの間投詞になってしまう、ドイツ語の肯定・感嘆の間投詞 »ah« もまたつづめることはできない。ドイツ語の »ja« は短く発音してもそのまま肯定の間投詞でありつづける。ここには、緊張の半母音 [j] がきいているのである。

ドイツ語の時間指示語、»jetzt« では、三つの破裂子音の連続の直前で極端に圧縮され、緊張を高められた半母音 [j] と母音 [e] の連続が、指示の及ぶ範囲を限定し、指示点を引きつけている。»später« では、母音 [ɛ:] が伸びてしまって、指示の及ぶ範囲がぼやけてしまい、指示点を身近に引きつける力はない。

さて、ドイツ語の »jener« と »dieser« の対立である。際立ちという観点から考えると、破裂音 [d] と、半母音 [j] とでは、何ととっても前者が強い。破裂音 [d] は指示の及ぶ範囲をより近くに限定し、それに対して、半母音 [j] は指示の及ぶ範囲をそれほど近くには限定しない。その結果、»dieser« が »jener« よりも指示点をより近くに引きつけ、近くを指し示すことになっているのである。»jener« の指示点を伸ばす要因は、前項(2.1.1)で述べた、舌尖や唇の位置の他に、伸ばす母音 [e] であると考えられるが、その点については、(2.1.7) で議論する。

ドイツ語では、[k] の音を使った擬音表現が特異的に多い、ということを私は竹内1999で指摘した (»klingen (ベルを鳴らす) «、»klappern (パタパタいう) «、»knabbern (ポリポリ食べる) «、»knacken (ポキッと音をたてる) «、»knallen (ドカンと音をたてる) «、»knappen (ガチャンという) «、»knaps (パチン) «、»knarren (がらがら) «、»knatsch (いざこざ) «、»knattern (ばりばり) «、»knautschen (しわくちゃにする) « など)。[k] の音はドイツ語では、際立ちの音なのである。

日本語の指示語、「あれ」、「これ」、「あそこ」、「ここ」などでは [ko] と [a] が対立するが、ここでも、破裂音 [k] は際立ちを表わし、鋭い近接の指示に貢献していると考えられる。

2.1.3 破裂による前方への呼気吹き出しによる指示方向の写像

呼気の通路をいったん閉塞して、破裂させることによって、呼気は前方に強いエネルギーをもって吹き出され、このことによって、表現に前方への強い方向性が与えられる。このことにも、発声形態という身体的現象への指示の意味機能の写し取りが見られる。

有声歯舌摩擦音 [ð] の音は、音声学では摩擦音に分類されるが、語頭におけるこの音と母音との連続は、破裂の発声形態であるといってよいと思う。[ð] の音を発生する摩擦のための狭めが非常に強いため、母音の開放的な呼気の流れへの連続性において、破裂的な性格が非常に強くなるのである。»the«、»this«、»that« などの英語の指示語の語頭にはこの [ð] の音が、後に続く母音と組み合わせられて使われているが、音の発声に口の前方の舌と歯が使われていることと、破裂による呼気が激しく前方に向かうことが相乗的に働いて、これらの表現では、指示の働きが非常にうまく表現されている。呼気の勢いと方向性が指示のメタファーとして働いているのである。

(2.1.1) で触れた、ドイツ語の »hier« と »da« の対立にもまたこの説明が有効である。無声硬口蓋摩擦音 [h] に較べて瞬間的で、衝撃や力のこもった有声歯舌破裂音 [d] が使われていることが、後者の前方への強い指示方向を示し、到達点を延ばすのに役立っているのである。

日本語の指示表現「この」の語頭の硬口蓋破裂音 [k] についても、やはり同様に、破裂という発声における身体現象への指示という認知のまとまりの写し取りが指摘できる。

2.1.4 伸ばしという発声形態による到達距離の伸びのなぞり

破裂を使った指示には、その射程に適切な距離があるのだろう。破裂の勢いの強弱によって、その影響を及ぼすことのできる対象の位置の遠近の違いが出るにしても、その影響の範囲はある程度の距離を超えることはできない。近くの対象を破壊するには、爆弾のテロが有効だろうが、ずっと遠くの対象を破壊するにはミサイルを使って到達距離を伸ばさなくてはならない。ドイツ語では、指示語 »da« を、[da] と短く発声する場合と、[da:] と長く発声する場合では、後者の方が遠くを指示する感じが出る。これは、発声の伸びによって、長い到達距離を線としてなぞっていると考えるとわかりやすい。この発声の伸びによって、指示の到達距離は伸ばされているのである。

同じことは、例えば日本語の指示語「あれ」を「あーれ」と伸ばして発声するか、それとも「あれあれ」と短く繰り返して発声するのかで、指示の遠近の差が出ることにもみられる。前者の伸ばした発声の方が、遠くを指示す

るのに適しているのである。逆に、「これ」を「こーれ」と長く発声するのは、強調のニュアンス以外ではおかしく思われる。これは、指示語「これ」の発声における、舌尖の位置や、[k]音による際立ちなどによる、近くを指示する機能が、伸ばす機能と矛盾しあってしまうためだろう。このような矛盾の発生を避けるための仕組みが働いているのである。

同様に、英語の指示語 *that* は、長く伸ばして [ðɑ:t] と発声してもおかしくなく、それで、指示の到達距離を伸ばすことができるが、*this* を長く伸ばして [ði:s] と発声するのは、強調のニュアンス以外ではおかしいように思われる。この場合にもまた、複数の身体メタファーが同時に働いて矛盾を起こしてしまうことを避ける機構が働くのだろう。

2.1.5 素直な発声による到達距離の伸びの写像

日本語の「あれ」と「これ」では、「あれ」が遠くの対象を指示し、「これ」が近くの対象を指示するのに使われる。この二つの表現では、母音 [a] と [o] が対立しているが、[a] の場合は、口全体が大きく広げられ、舌尖が前に出る結果、舌の位置が低くなり、母音の中でも最も抵抗がなく発声される。[o] の場合はそれにくらべると、唇を丸めることと、舌尖が引きぎみにされることによって舌の高さが高めになり、口腔は狭められ、発声の際の抵抗が大きくなる。このような、発声の際の、抵抗の大小もまた、指示の遠近のメタファーとして働いていると考えられる。

ドイツ語の、»dies« と »jen«、英語の »this« と »that« の母音についても同様のことが指摘できる。それぞれの場合の、近くを指示する表現にあらわれる母音の発声は抵抗が大きく、遠くを指示する表現にあらわれる母音の発声は抵抗の少ないものになっているのである。

2.1.6 摩擦による共感の写像

摩擦音 [s]、[z] が共感的な指示に貢献することは日本語の「それ」、「そう」、「そんな」に限らず、ドイツ語の »so«、»solche«、英語の »so«、»such« などに見られ、かなり広範な現象なのだと予想される。

私が箱などの固い表面をもつ対象と関わる運動をして、その対象が移動しているとする。表面を押した結果対象が移動する場合、対象を自分（私）の意志で（対象の意志と関係なく）移動させる感じが生まれる。表面に力を加えているのに、滑ってしまい、対象が私の加えるのではない力（斜面との摩擦、重力、対象に組み込まれている動力と車輪による力、など）によって、私の運動と関係なく移動する、または移動しない場合、その対象の移動する、または移動しないことは私の意志と関係がないような感じが生まれる。対象の表面に適当な摩擦があり、私の移動によって私と対象が連続的に擦れる結果、対象に移動が生まれ、その移動の方向が私の移動と一致する場合、対象は、勝手に動くのでもなく、対象のもつ意志に逆らうのでもなく、私の意志に応じながら、協調して移動するような感じが生まれる。この摩擦の程度が、「ガリガリ」という擬態語で表わされるような粗いものでも、「ツルツル」と摩擦がゼロに近づいてしまっても、協調という感じは生まれない。「スリスリ」、「ズリズリ」、「ズルズル」、という感じが、共感の感じなのである。

これらの共感的な指示語を聞いて理解するためには、聞き手は相手が何を基準にして指示を行なっているのかを推測し、わかろうとしなくてはならないのである。

2.1.7 発声形態の身体メタファーによるさまざまな指示の相関関係

2.1.7.1 身体メタファーによる指示の基本構造

メタファーというのは、写像することがらのある要素を切り取って提示する性格があることはよく知られている（Lakoff & Johnson 1980、竹内1995、Baldauf 1997）。これまで、つぎの6種類の発声形態の身体メタファーを使った指示について考察した。

- 1) 発声における唇や舌先の前後関係による指示の方向と遠近の写像
- 2) 緊張・際立たせによる指示の及ぶ範囲限定の写像
- 3) 破裂による前方への呼気吹き出しによる指示方向の写像
- 4) 発声の伸ばしによる到達距離の伸びのなぞり
- 5) 素直な発声による到達距離の伸びの写像
- 6) 摩擦による共感の写像

これらの身体メタファーによって切り取られる、指示を構成する要素は、大きく分けると、(I)トポロジカルな関係と、(II)量的な関係、そして(III)質的な関係の三つになる。

この場合の(I)のトポロジカルな関係というのは、基本的に指や矢印による指示と似ている。(1)のメタファーでは、認知主体を中心に考えて、舌尖や唇の前と後の位置関係と、指示対象の近くと遠くの位置関係の対応によって、指示の方向と遠近が構図的にわかるようになっている。また、(2)のメタファーでは、緊張・際立たせによって、ここまでが指示の範囲であるということが示されるのである。

次の、(II)の量的な関係というのは、指示における量的な距離の大きさの問題であり、(4)、(5)の発声上の伸ばしの量や、発声上の抵抗の少なさが、指示の距離の大きさと対応して、指示の遠近を示している。

そして(III)の質的な関係というのは、指示の行なわれる領域についての問題である。(3)、(5)のメタファーは、指示が前方に向いているというトポロジカルな関係を示しているが、同時に指示の領域が限定されない指示空間であることも示している。これに対して、(6)の摩擦による共感のメタファーは、指示が共感に関係した限定的な指示空間で行なわれることを示している。

そもそも、身体メタファーによる指示においては、指示のトポロジカルな関係の表現と、指示の距離の大きさの表現は、たいへん興味深い関係にある。トポロジカルな指示は、指示の構図や領域の設定などの大きな枠組みを設定し、量的な指示は、指示を遠くへ飛ばそうとするのである。英語の指示語では、歯舌摩擦音 [ð] と母音との組み合わせによる破裂などによって、ドイツ語の指示語では歯舌破裂音 [d] や半母音 [j] などによって、そして日本語の指示語では硬口蓋破裂音 [k] などによって、このトポロジカルな指示が行なわれる。その枠組みの中で、さらに様々な発声形態の身体メタファーによって、指示の到達距離の量が示される仕組みになっているのである。

それで、例えば、(2.1.1/2)で議論したように、ドイツ語の »jen« と »dies« の対立では、唇や舌の位置の前後関係や、破裂音 [d] と緊張の半母音 [j] が、まず、指示の構図や範囲をそれぞれ、認知主体の近くと、離れた所に設定す

る。»jen« の指示点の距離の長さの表現は、伸ばす母音 [e:] によってさらに補強される。

日本語の「あれ」と「これ」の対立では、硬口蓋破裂音の際立ちによって、「これ」についてだけ、指示の及ぶ範囲の限定が行なわれている。「あれ」には、このような指示範囲の限定がない。その結果、「あれ」では指示の到達距離の指定には、際立ちによる到達範囲の限定が伴っていない。この点では、英語やドイツ語などの、必ず指示音 [ð]、[d]、[j] などによる限定が伴う指示と日本語の指示とは様子が少し異なっているようである。

2.1.7.2 メタファーシステム間の矛盾の解消

(2.1.4) で私は、発声形態による身体メタファーのシステムの複数のものが同時に働いて矛盾が生ずる場合に、矛盾を起こすシステムの働きの一方が抑制される、という議論をした。二つの要因が働いて、矛盾が生ずる場合に、どちらのシステムの働きが抑制されるべきかを決定する仕組みとしては次にあげる二つのものが働いていると考えられる。

一つの仕組みは、指示というものの基本的な構造に基づいている。矛盾を引き起こす一方の要因は、身体メタファーの指示によるトポロジカルな指示であり、もう一方は、指示における距離などの大きさをきめる量的関係である。前者によるトポロジカルな指示の構図を基礎に量的な指示関係を成り立たせるといのが、そもそも指示というものの基本構造なのである。この構造が基本にある限り、トポロジカルな指示を表わすメタファーのシステムが、量的な指示を表わすメタファーに優先され、メタファーシステム相互の矛盾が生じた場合には、優先順位の低いものが排除されるという仕組みは理にかなったものであるといえる。

もう一つの仕組みは、Bybee, Perkins & Pagliuca 1994 等の主張する、文法化の程度と関係しているのだろう。身体メタファーの文法化の深いものが、文法化のより浅くメタファー的な性格が強いものを排除する仕組みになっているのではないだろうか。

2.1.7.3 メタファーシステム間の協調

ここまで議論した発声形態の身体メタファーによる指示では、前項で触れたような、システムの間にも矛盾が生ずる場合よりも、それぞれの身体メタファーのシステムの間にも協調的相関関係が成り立っていることが多い。例えば、破裂による前方への方向性のメタファーは、破裂の際立ちによる指示範囲の指定のメタファーと同時に働いて、指示の確実さを高めている。また、発声の伸ばしによる指示の距離の長さのなぞりは、素直な発声と抵抗の少なさによる指示距離の長さの伸びと相関している。素直で抵抗の少ない発声の仕方は、音を伸ばす発声にも適していて、この折り合いの良い発声形態が、共に指示の距離の長いことを示すのに役立っているのである。

二つのメタファーシステムが相補的に、指示の意味を表現するのに役立っていることも指摘しておきたい。破裂音による際立ちは、指示の距離を限定するのに使われ、伸ばしの発声は指示の距離を伸ばすのに使われる。指示の範囲を限定することと、指示の距離を伸ばすこととは、相互に対立・矛盾することであるが、これを表現する発声を実現する身体の働きもまた、同時に起きることではない。音声を伸ばしながら同時に破裂させることはできないのである。

このような二つのメタファーシステムの相補的相関関係は、舌先を突き出すことによってより前方を指示することと、舌の高さを上げて発声の抵抗を増やし、指示の距離を伸ばさないこととの間にも見られる。身体的には、舌先を突き出すことによって、舌の高さは低くなり、口腔の中は拡がり、発声の抵抗は少なくなる(風邪を引いて、お医者さんにかかると、「はい、『アーツ』、舌を出して」といわれてのどの奥を覗かれるが、これは、舌を出すことによって、舌の高さが下げられ、口の奥まで視線をさまたげるものがなくなるからである)。反対に、舌先を引っ込めることによって、舌の高さが高くなり、口腔の中は狭まり、発声の抵抗は大きくなる。互いに矛盾する指示行為が、身体メタファーによって同時に実行されることはないようになっているのである。

ところで、言語記号の寿命の長さ、短かさはどのように決まるのだろうか。受け入れられやすい新記号があったり、廃れにくく、古代語から引き継がれ

ている、息の長い言語記号があるのはなぜだろうか。この問題は、そもそも言語学の興味深い問題の一つである。言語記号のメタファー性を前提として話をすれば、一つの記号において、複数のメタファーの機能が相関・協調するほど、言語記号としては質が高く、受け入れられやすく、長い時代を生きのびることのできるものになるのではないだろうか。また、逆に、内部に矛盾があるような言語表現は、質の悪いものであり、受け入れられる可能性も低く、また受け入れられたとしても、すぐに廃れてしまうのだらうと予測される。

2.2 否定

2.2.1 呼気の閉塞・通過妨害による否定の写像

日本語の疑問表現に使われる音には、口蓋を通る呼気を舌によって閉塞した鼻音 [n] が使われる。この閉塞に関係した鼻音は、かなり普遍的に否定と関係するのだらう。通行の妨害、閉塞は、動物にとって一般的で基本的な否定の経験なのである。日本語の否定表現である「～ない/～ん」や「ううん」、否定に関係する擬態語、「なかなか」、「ぜんぜん」、「にっちもさっちも」、「うんともすんとも」にはこの鼻音の [n] が使われているし、英語やドイツ語の否定表現、»no«、»not«、»never«、»nein«、»nicht«、»nie« などについても、事情は同様である。呼気の通行を閉塞する発声の仕方に、否定という意味のまとまりが投影されているのだと説明できる。

閉塞鼻音 [n] の他にも、閉塞的な発声形態への写像による否定の表現と考えられる例には、ドイツ語や英語の量に関係した否定関連表現の »wenig« と »little« が挙げられる。これらの場合にも、発声器官の口では、唇と歯による呼気の閉塞、舌による呼気の通過の妨害が起きている。日本語の量に関係した否定関係語には、「ちょっと」や「ぜんぜん」が考えられるが、これらの例でも舌と歯茎による呼気の閉塞や、舌と歯による呼気の通過の妨害が起きている。

2.2.2 指示による否定の強調

日本語の禁止表現「だめ」の始まりの音にも、舌と歯による呼気の閉塞が

起きているが、しかし、これは指示的意味を表現するのに適した有声歯舌破裂音 [d] でもある。禁止するためには何が禁止の対象なのかということと、行為やその開始の中止への要請が強いことが示されなくてはいけない。このような、禁止にまつわる認知的状況が、指示音 [d] に投影していると考えられる。「ダメ」と言う時の身ぶりは、日本語の表現に伴うものの中でも際立って指示的である。

2.2.3 はらいのけ・横方向の動きによる否定の写像

拒否表現の「いや」や、「いいえ」では、[i] の音が使われている。この母音の発声では、舌の先が後ろに下げられ、その結果生じた舌の高い位置が口腔内の空間を狭め、呼気の通過に抵抗感を与えていると同時に、唇が横方向に引っ張られている。この横方向に関係した発声形態が、首を横に振ったり、手を横に動かして相手から自分への働きかけをはらいのける、否定の動作と調和しているのである。「いや」や「いいえ」は、はらいのけの動作に否定を投影させた表現なのだろう。ドイツ語の »nein«、»nee«、»nie« にも同様のことが観察される。

2.2.4 際立たせと否定

ところで、ドイツ語の kein は、不定冠詞 »ein« に [k] の音がくっついている。»kein« の否定は、指示、同定された対象が、あるカテゴリーに属さないということ表現する。この否定では、あるカテゴリーに関心が当てられていて、またある対象が同定される場合に、その対象がそのカテゴリーに属するという期待が前提にされている。それで、(1)の例文は、たくさんのリンゴと、それに混じったいくつかのナシを連続して提示された話者の発話として適切なのである。他方、片寄りなく混じったリンゴとナシが提示された場合や、特に、三つ以上の片寄りなく混じった果物が提示された場合は、(2a)や(3a)の例文のほうが、»kein« による否定を使った(2b)、(3b)の例文よりも自然である。

- 1) Ein Apfel, ein Apfel, ein Apfel, ein Apfel, kein Apfel, ein Apfel,...
(リンゴ、リンゴ、リンゴ、リンゴ、リンゴじゃない、リンゴ、…)

- 2a) Ein Apfel, eine Birne, ein Apfel, ein Apfel, eine Birne, eine Birne,...
(リンゴ、ナシ、リンゴ、リンゴ、ナシ、ナシ、…)
- 2b) Ein Apfel, kein Apfel, ein Apfel, ein Apfel, kein Apfel, kein Apfel,...
(リンゴ、リンゴじゃない、リンゴ、リンゴ、リンゴじゃない、リンゴじゃない、…)
- 3a) Ein Apfel, eine Birne, eine Orange, ein Apfel, eine Orange, eine Birne,...
(リンゴ、ナシ、オレンジ、リンゴ、オレンジ、ナシ、…)
- 3b) Ein Apfel, kein Apfel, kein Apfel, ein Apfel, kein Apfel, kein Apfel,...
(リンゴ、リンゴじゃない、リンゴじゃない、リンゴ、リンゴじゃない、リンゴじゃない)

語頭の位置で際立ちを表わすドイツ語の音素 [k] は期待される »ein« の連続が途切れることについて注意の喚起をうながすのである。当然の期待が切り替わるといふ際立ちのマークに、カテゴリーに属さないといふ際立ちタイプの否定の認知のまとまりが投影されるのだと考えられる。

2.2.5 否定に向かない音韻連鎖の予測

ここでの議論を逆立ちさせてみる。母音 [a] を延ばして緊張を込めずに発音する [a:] は、一番抵抗の少なく、横への方向性と関係なく、強い指示性や際立ちの少ない音のまとまりだといえる。口などの発声器官を使った言語においては、この音が否定の表現としてはもっとも出現しにくいものと予測される。実際にはどうなのだろうか。

2.3 疑問

2.3.1 驚きと疑問

英語やドイツ語の、[hw] + [a] や [va] は基本的には驚きの音であって、附随する動作は、眉を上げ、目を見張る、口を大きく開けるなどの驚きのしぐさである。突然、何かの予期しなかった事態が起こると、私たちは、その

瞬間には何が起きたのかわからずに、驚いてしまう。このような驚きの場合に、「わっ！」と言うのは基本的に人間に普遍的な現象で、英語やドイツ語では、この驚きに、»what« や »was« で表現される、未知の対象についての疑問が投影されている。英語やドイツ語の疑問表現は、「未知の対象についての疑問」というとらえどころのない認知のまとまりを、突然の事態に対する驚きという誰にでもわかる基本的で、身体的な経験に投影したメタファーなのだと考えられる。だから、英語やドイツ語では、対象についての疑問詞を使った表現が、同時に感嘆表現となることができるのである。

しかし、英語の疑問に使われる [hw] 音と、ドイツ語の疑問に使われる [v] 音には大きな違いがある。[hw] 音は、細め、丸められた唇の開きかげんによって、抵抗の少ない、前に出るきっかけ的な音である。それに対して、[v] 音は歯と唇で閉じられた口腔を突き破って発声される、抵抗の大きく重たい有声音である。この点については、以下で議論する。

2.3.2 情報の欠如・知識のつながりの滞りという認知のまとまりの否定音への写像

日本語の疑問表現「なに」、「なぜ」、「なんで」などには、閉塞鼻音 [n] が使われている。この音が否定に使われる音であることはすでに議論したが、これらの疑問表現の場合には、疑問が表現されるのに否定が関係しているということが考えられる。情報がなくてわからないから人間はとまどい、疑問を発するのであり、この音を使った疑問表現では、情報がなくてわからないことを否定の音に投影していると考えられる。だからこの種の表現を使う場合には、身ぶりとしては、首をひねったり、かしげたりする動作が現れる。同様に、日本語の疑問表現「いかに」の場合も、否定の項目で議論した、[i] の音や [k] の音が使われ、否定が関係して、疑問が表現されるのだと推定されるのである。

ドイツ語の疑問表現 »wer«、»was«、»wie«、»wann«、»wo«、»warum« における閉塞音 [v] もまた、否定という認知のまとまりを呼気の通過の妨げに写し取っている。この場合の否定は、知識のつながりへの滞りとそれにとまどい、驚きや困惑を表現するのに適している。»was«、»das« においては、[v] の音はそれぞれ、物と人を表わす形態素、»(d)as« と »er« とに結合して、物

についての疑問、人についての疑問を表現することになっている。理由を表わす疑問詞 »warum« の場合、[v] の音は形態素 »um« と結合しているが、»um« もまた、事態・事件の周縁的な事情への関心を表わしている、写実性の高い形態素である。ここでは、事件の周縁的な事情の最優先事項、つまり、どうして事件がという理由が問われることになる。これらの表現では、[v] の音における閉塞・滞りという身体的な要素と、形態素による意味表示が補い合いながら、疑問詞全体の意味が形成されているのである。

同様に、英語の理由に関わる疑問詞 »why« の場合、[hw] + [a] は疑問に含まれる驚きを写し出しているが、[ai] のうねりは、驚きのインパクトを弱め、困惑に変換している。»why« は、»how« と同じように、事態・事件の成立の経緯に関心が向いた疑問である。しかし、»how« の場合は、事態・事件の成立を、その始まる以前の時点参照点にして、未来に向けた視線でとらえているのに対して、»why« の場合は、成立した事態・事件を、その成立後の時点参照点にして、過去に向けた視線からとらえている。»how« の用法のプロトタイプは、»How can I get your office?« のような、これからの行動の仕方を問うものである。他方、»why« の用法のプロトタイプは、»Why are you here in my office so late in the midnight?« のような、すでに成立している事態の成り立った経緯を問うものである。後者の場合、うねりながら伸ばされる二重母音 [ai] は、この経緯をなぞるメタファーなのだとして理解される。»why« の場合、この過去の経緯が見えないから、障害+驚きの [hw] 音が使われるのだし、»how« の場合は、この経緯は、どちらかということこれから考えていくものだから、障害と驚きの [v] 音よりも、驚きだけの [ha] 音が使われているのだろう。

2.3.3 見えない対象への関心、指示・探索と疑問

日本語の疑問表現には「どう」、「どこ」、「だれ」など有声歯舌破裂音 [d] を使ったものがある。

[d] 音はすでに指摘したように、指示に適した音である。これらの疑問表現に、この指示に適した音が使われているのは、存在はしているが霧や被いで視線が遮られているなど、何らかの理由で見ることのできない対象を指差そうとする振る舞いが、疑問という認知のまとまりに組み込まれているから

だろう。見えるはずの対象に視線を向けて、情報を探すことと関係しているのだと考えてもよい。この疑問表現に附随する動作は、口や顎を突き出したり、対象を探して特定しようとする視線の動きであったりする。見えない対象を指示しようとする行為が、疑問のメタファーになっているのである。

英語の疑問表現を特徴付けている [hw] の音は、驚きの音であると同時に、抵抗の少ない、前に出る、勢いのある息の流れの始まりをつくる音である。英語の人の同定に関係する疑問詞 »who« の場合、[hw] の音は、[u:] の母音の発声の際の、細く丸めた唇を通る息の流れの指向性と組み合わせることによって、名前を知らない相手への関心を示している。

ドイツ語では、疑問を強めるのに、»denn« という、指示の [d] の音を使った表現が使われる。おそらくは、この表現による指示によって、知りたいことや知りたい対象への距離が引きつけられ、知りたいという関心が強く表現されるのである。すでに議論したように、日本語の疑問表現にもこの指示の [d] の音が使われるが、疑問という認知のまとまりには、潜在的に指示が組み込まれているのである。»denn« という指示に関係した表現を付加することによって、驚きやとまどいの [v] 音を用いた表現は、単なる驚きやとまどいの表現ではないことがより明確になる。

2.3.4 発声の短・長と継続・瞬間

時間を表わすドイツ語の疑問詞 »wann« の場合、鼻音 [n] で音節をしめくくる音節構造は母音 [a] の響きを圧縮し、事件の発生する時間という、瞬間的な対象への関心を示すのに適している。この疑問詞の場合、[w] + [a] の結合があるのに、驚きの表現にはなりにくい。»wann« から派生したといわれる、条件をあらわす »wenn« は、この接続詞を使って表現された事態・事件が何の滞りもなく、直接に事実として受け止められるのではなく、保留つきで受け止められることを求めている。それに対して、唇や舌尖の位置が前の方に構えられ、舌の位置が下げられる結果、最も抵抗の少ない母音 [a] を伴う »wann« の場合は、ある事件の起きる時間についての疑問という認知的なまとまりが、瞬間的な対象についての知識の滞りとして表現されることになるのである。

英語の »when« では、鼻音 [n] でしめくくる音節構造は母音 [e] の響きを圧縮し、場所という時間を限らない対象への関心を示す »where« の場合と違って、事件の発生する時間という、瞬間的な対象への関心を示すのに適している。

英語の »what« やドイツ語の »was«、日本語の「なん/なに」は、物・非人格対象についての疑問詞であるが、これらの表現の中に現れる母音は、通常は短く発声される。これは、物についての疑問はたいていの場合、対象が時系列において連続的に存在していることが意識されているのではなく、ある瞬間における、ある対象のカテゴリー帰属が意識されている、ということと関係しているのだろう。

英語やドイツ語では、人の同定についての疑問詞 »who« や »wer« は明らかに、物についての疑問詞 »what« や »was« よりも長めの発声をされ、発声的な理由からも、驚きの表現には適していない。人の同定という意識もまた、対象のカテゴリー帰属についての意識よりは時系列にそって長めである可能性はある。»He is a teacher« という場合、昨日は学生であって、明日は失業者になる場合でも、今の職業が教師であればよい。他方、»He is Goerge« という場合、彼が昨日改名したとか、明日改名するとかは想定されないのが普通であるし、ましてや、彼の人格がある時点で突然入れ替わってしまうなどということは、万が一にもあり得ないことだと無意識のうちに確信されているに違いない。

英語やドイツ語の人の同定についての疑問詞と違って、日本語の人の同定についての疑問詞「だれ」の中に現れる母音は、通常伸ばされることはない。日本語で「だれ」と問う場合、その人間についての関心は、時間軸上に延長をもつ人格には、あまり及んでいないのかもしれない。「あなたはだれが好きなの」、という質問によって、「れいなちゃん」という個人名（私の家の隣の娘さんの名前です）が特定された場合、「それはどんな人なの」という人格についての質問がつけ加えられるスクリプトが一般的なのは、そのような事情によるのだろうか。例えば、ドイツ語での一般的な会話では、»Wen magst du eigentlich?« に対して、»Peter« という答えが返ってきたとしたら、さらにそれにたたみかける質問では、もう一度同じ疑問詞を使って、»Wer ist denn Peter?« と問われるのが一般的なスクリプトなのではないだろうか。

「だれか来てくれ」、「だれか居ないかな」、「だれもいないよ」のような表現にみられるように、日本語の「だれ」は不特定の人間に言及する場合にも使われる。これは、非人格対象についての疑問詞「なに」の場合も同様で、「なにか食べるものがあつたらいいな」、「なにか食べるものがないかな」、「なにも食べるものはないよ」などにみられるように、不特定の対象に言及するのに使われることがある。この場合の発声的な特徴は、やはり、通常は母音が伸ばされないということで、疑問の関心がある瞬間に限られることを示唆している。それぞれの疑問詞について、第三番目の例文では、「だーれも」とか、「なーんにも」のように、疑問詞の中の母音が伸ばされることがある。この場合には、探索可能領域のすべてを、時間をかけて探索しつくしたという、探索の経路のなぞりが、長母音に写し出されていると考えられるのである(2.3.6参照)。

2.3.5 中途半端なうねる母音による無特徴の表現

場所に関わるドイツ語の疑問詞 »wo« の場合にも、閉塞音 [v] による、知識のつながりへの滞りが関係している。うねりながら延ばされる中庸な母音 [o:] との連続 [vo:] は [va:] と違って、驚きにつながらない。[v] と短母音 [o] との連鎖 [vo] が、前置詞との融合形を作ることから推測されるように、wo は無特徴の疑問であり、漠然とした、知識のつながりの滞りを表現しているのかもしれない。

疑問というのは、認知的には基本的に問われることからの所在場所の探索と関係している。物質を基本とする私たちの生活において、基本的にほとんどの対象は場所を占めるのであり、ほとんどの疑問には、場所の探索が含まれる。場所というのは、非常に重要でありながら、しかも、あまりに重要であるために、最もあたりまえで目立たない認知のまとまりなのだろう。記号システムの構成という観点から考えると、他の [v]+母音連鎖が、何らかの特徴をもった疑問を示し、最後に残った一番特徴がない疑問表現が、場所という、最もあたりまえで目立たない認知のまとまりについての疑問表現になるということは、システムの効率を高めるということにもなっている。

英語の場所に関係する疑問詞、»where« における [hw] の音と [eə] の二重母音の組み合わせは、人の同定に使われる疑問詞 »who« における [hw] の

音と [u:] の長母音の組み合わせほどに、細く指向性を持った息の流れをつくらない。[eə] の二重母音の作り出す軽いうねりもまた、場所についての疑問に適しているのである。

日本語の場所に関係した疑問詞、「どこ」の場合は、「どこっ」とつづめられる場合と、「ど〜こ〜」とうねりながら延ばされる場合では、感じがまったく違ってくる。「きゃあ〜！ねずみよ！」、「どこっ！/「ど〜こ〜？」の文脈に見られるように、前者の場合は、短さによる緊張と、際立ち音 [k] によって、どちらかというところと驚きが表現され、後者の場合は、うねった長母音によって、際立ち音 [k] の効果が打ち消され、表わされるのは、どちらかというところと甘えや、寝ぼけ、無関心を伴った探索のふりである。

これらの驚きの伴わない場所への疑問においては、うねる長母音が使われていることは、場所の探索が、認知的には経路のたどりを含んでいることと関係している。どこかの場所を探すのには、歩きながらその場所が見つかる所へ移動したり、目線でたどりながら、探す対象のあり場所まで目線を移動させなくてはならない。次の項目でも議論するが、長母音のうねりは、なぞりのメタファーとして使われ、この点においても、ここで議論した疑問表現は、場所についての疑問表現として適切な形をもっているのだといえる。

2.3.6 長さのなぞりと方法・仕方についての疑問

ものごとを成立させる方法・仕方についてのドイツ語の疑問詞 »wie« の場合、有声歯唇閉塞音 [v] による、知識のつながりへの滞りの表現をベースに、長母音 [i:] のうねりによる、ものごとを成立させる方法・仕方のなぞりがなされている。

例えば、家の建て方を説明するのには、家を建てる作業の始まりから終わりまでの、それぞれに異なる複雑な仕事を時系列にそって記述することが、わかりやすい。ものごとを成立させる方法・仕方は時系列にそった長さである。しかも、この長さは、単調なものではない。単調な仕事の連鎖では、方法・仕方というに値する複雑な営為を構成しえないのである。長さをなぞるのには、瞬間的な音声や単調な音声は向いていない。長母音のうねりは、変化のある時系列をなぞるのに適している。有声歯唇閉塞音 [v] を伴った、こ

の物事の成立の流れのなぞりに、ものごとを成立させる方法・仕方への疑問が投影されているのである。

英語の方法・仕方についての疑問詞「how」には円唇音 [hw] 音が使われていない。これは、方法についての疑問はなぞりなので、[hw]音による指向性は必要でなく、どちらかというとき驚きを表わす音の [h] に二重母音 [au] によるうねりが付けば、それで十分に、この疑問を表現することができるのだろう。

日本語の方法・仕方についての疑問詞「どう」にもまた、[ou] という二重母音が使われている。「どう」の場合は、[d] 音での探りと、二重母音でのなぞりに、隠されて見えない方法・仕方への疑問が投影されているのである。

3 結論：認知のまとまりとはどこにある何ものなのか

言語の指示表現を発声形態の身体メタファーとして考察してきた。この考えの枠組みで考えると、例えば、日本語と英語やドイツ語では、疑問を写し取っている言語音の性格が違っているのである。私は大学でドイツ語を習い始めてから25年以上、ドイツ語を教える仕事を始めてから15年以上たっているが、この事実を指摘した議論にお目にかかったことがない。Pinker の言語音と意味の関係についての指摘をきっかけに考察を進めて、ようやく、こんな基本的なことがらに気がついたのである。

日本語の疑問には、情報の欠除・知識のつながりの滞りに疑問を投影させるものと、見えない対象を探索、指示しようとするものの大きく二通りのものがあり、英語やドイツ語では、驚きや情報の欠除・知識のつながりの滞りに疑問が投影されて表現される。このことを意識しながら、「これは何だろう」、「What is this?」、「Was ist das?」などの例文を口にし、また理解してみると、これは感じがずいぶん違う気がする。

ところで、指示や、否定、疑問などの、これまでもっとも基本的な言語の意味の構成単位だと考えられてきた、認知のまとまりが、ここでの議論のように、実はそれぞれの言語での身体メタファーによる表現のされ方が全く異なるものであるとしたら、そもそも、それらの認知のまとまりとはいったい、どこにある何ものなのだろうか。これらの認知のまとまりは、認知システム

全体の中でどのようなステータスを持っているのだろうか。

私は、指示や、否定、疑問などの認知のまとまりが、いわゆる言語普遍のような絶対的な存在として、人間の認知システムのどこかにあるのだとは考えない。これらの認知のまとまりとしてとらえられているものは、私たちが人間の認知について議論するために想定する抽象的な道具立て、つまり名前なのだ考える。

では、その、指示、否定、疑問などの名前は、いったい何を指示するのか。これらの名前の指示対象は、この論文で議論した、発声形態の身体メタファーによって表現しているものも含め、私たちがその名前にふさわしいと信じて行なっているそれぞれの認知活動である。これらの名前の使用は、「私は私が『指示』と思うものを『指示』と呼ぶ」のような同語反復的なものであり、私たちが、自分の認知生活を通じて獲得している確信以外に、その正しさを保証するものはないと言ってよい。私たちが、それぞれの言語の言語生活において、例えば、「疑問」という名前を与えている認知行動の一つ一つが、同じ性格のものであるかどうかといえ、それらは家族的な類縁性によって結びつけられているものであって、それ以上のものではない。

個別言語を超えた、つまり、複数の個別言語を扱う議論においても、別個の認知行動を同一の名前で名指さすことができるのは、家族的類縁性のような、あるカテゴリーをあるカテゴリーとしてまとめあげる力による結びつきによって、そうしてよいという確信が持てるからであり、それ以外の保証というものはない。

とするなら、ある個別言語における別個の認知活動を、同一カテゴリーに属すると認めることと、別々の個別言語における別個の認知活動を同一カテゴリーに属すると認めることとの間に、決定的な質の差を見出すことは不可能である。それぞれの認知活動は、それぞれの認知活動を基礎づける諸条件によってのみ性格づけられるのであって、その諸条件は、個別言語を超えて共通性を持つものもあれば、同一言語においても、全く異なる性格を持つものもあるだろう。それらを同一のカテゴリーと認め、同一の名前で名指すことができるのは、それらを、何らかの点で似ているものと認識し、その似ていることが、さらに、その他の諸活動の間の類似性との関係で、カテゴリー

をまとめあげる結束力を持つことができるかどうかにかかっているのである。

私たちには、そのような、家族的な類縁性によって結びつけられる、いろいろな認知のまとまりが、それぞれの実際の言語活動において、どのような具体性をもって、表現され理解されるのかの実際に関心をはらう以上のことはできないのだと思う。つまり、安易に、日本語の認知システムは、ドイツ語の認知システムや英語の認知システムとどう違う、こう違うなどということは、してはいけないことなのである。というのは、これらの、認知活動が言語に表現され、理解される実際とは、私たちの認知システムが、私たち認知科学研究者の知的関心に対して、アクセスを許している、ほんの上っ面、氷山の一角なのであって、その下の部分にどのような複雑で巨大な認知のシステムが働いているのかなど、現在の科学の水準からはわかるはずもないことなのである。

私たちには、何かとらえ所のない、しかし共通の名前を与えることがふさわしいと思われる、認知行動がある。そして、その認知行動には、私たちが、その認知行動を言語的に、身体メタファーを使って実行するということが含まれている。私たちの認知行動は、私たちの認知生活の総体なのである。私たちに、この総体としての認知行動を、言語行動として実行することが、それぞれの言語行動の現われにおいて異なった様相をみせているということしか、観察ができない。しかし、そのような様相を観察しながら、その背景の奥深さを想像できるだけで、これはなかなか面白いことなのだ、私には思われる。

参考文献

- Baldauf, Christa 1997: Metapher und Kognition, Grundlagen einer neuen Theorie der Alltagsmetapher. Sprache in der Gesellschaft, 24. Frankfurt am Main: P. Lang
- Bybee, J., Perkins, R & Pagliuca, W. 1994: The Evolution of Grammar, Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World. The University of Chicago Press.
- Johnson, M. 1987: The Body in the Mind, The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason. The University of Chicago Press.
- Lakoff, George 1987: Women, Fire, and Dangerous Things, What Categories Reveal about the Mind. The University of Chicago Press.

- Lakoff, George & Mark Johnson 1980: *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Johnson, Mark 1999: *Philosophy in the Flesh, the Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. Basic Books.
- Pinker, Steven 1994: *The Language Instinct, How the Mind Creates Language*. William Morrow and Co. (言語を生み出す本能 (上・下)」、日本放送出版協会).
- 竹内義晴1995: 認知的情報処理機構としての意味・理解の写像について, 認知的メタファー論. 「好村富士彦教授退官記念論文集」, 195-206ページ
- 1999: 言語表現の身体性について, 認知構造, メタファー, オノマトペ. 「金沢大学文学部論集, 19号」, 87-117ページ